

町史

とっておきの話

292

国立科学博物館
分子生物多様性研究資料センター

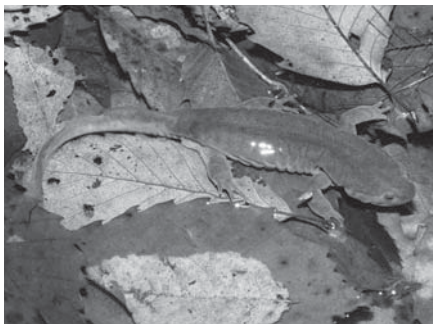
吉川 夏彦
よしかわ なつひこ

カエルとサンショウウオの楽園・ただみ

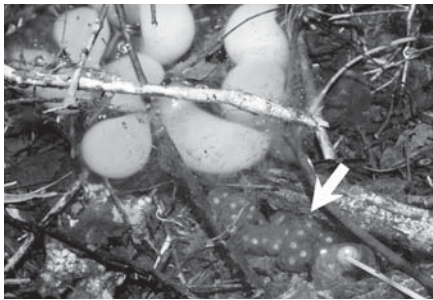
只見町のサンショウウオ①

池や湿地にすむ仲間

▼今月号からの執筆者は、タダミハコネサンショウウオを新種として記載された吉川夏彦さんです。日本産ハコネサンショウウオの系統分類をすすめ、新たな種を次々に発表されている新進気鋭の研究者です。どうぞ、只見の両生類の世界をお楽しみください。



▲産卵期のクロサンショウウオのオス(南相馬市)



▲写真上はクロサンショウウオの卵囊、矢印はトウホクサンショウウオの卵囊(石伏)

只見町は豊かな森林と水に恵まれ、山の溪流や湧水、人の営みを作り出す水田や池など、水場環境の種類も多様です。そのためカエルやサンショウウオなどがとても多く、彼らにとっては楽園と言っている場所です。田んぼや溪流ではたくさんのカエルが鳴き、オタマジャクシが泳いでいるのを見ることがあると思います。その一方でサンショウウオの仲間

は昼間は隠れていることが多く、カエルのように鳴くこともないので影が薄い存在ですが、ひっそりと、しかし確かに只見の自然の中に息づいています。

サンショウウオ類はカエルなどと同じ両生類の仲間で、長い尾があることから有尾類と呼ばれます。只見町には5種の有尾類が生息しており、イモリ科のアカハライモリとサンショウウオ科のクロサンショウウオ、トウホクサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、そして二〇二四年に只見町で発見されたタダミハコネサンショウウオが知られています。

アカハライモリは本州・四国・九州に広く生息し、只見ではガモリとも呼ばれて田んぼや池などでよく見られます。お腹が赤く目立つので印象に残っている方も多いのではないのでしょうか。アカハライモリは体に毒を持っており、目立つお腹は鳥などの天敵に毒があることを記憶させるための目印になります。イモリを食

べょうとしてひどい目にあつた鳥は、次から赤いお腹のイモリを避けるようになる、という寸法です。この毒は人が触ってもほとんど害はありませんが、触れた手で目や鼻を触ると激しくしみるがあります。触つたら必ず手を洗いましょう。

クロサンショウウオは北陸地方以北の本州に分布する比較的大型の種類で、全長15cmほどになり、体つきもがっしりしています。4〜5月の雪解けの頃、池や湿地の少し水深のある場所に沈んだ枝や草に、白くて丸いやわらかい卵囊(卵の入った袋状のもの)を産みつけます。春の山の中、雪解け水が溜まった水たまりではこの白い卵囊がよく目立ちます。この卵囊の中には70個ほどの卵が入っていて、孵化した子ども(幼生)は池の中で成長し、多くは夏の間に変態・上陸して森の地面で陸上生活を始めます。イモリとは違い、サンショウウオ科の仲間は成熟すると繁殖期以外は水に入ることはほとんどありません。狭い水場で生活するクロサンショウウオの幼生は共食いが非常に激しいことが知られており、共食いを始めた幼生は頭部が巨大化し、より共食いしやすい形(共食い型)に変化します。仲間

間の幼生を食料にしても急速に成長し、水場が干上がる前に上陸して生き残るための戦略の一つだと考えられます。春には雪解け水が豊富な水溜りも、夏には徐々に水が減って干上がってしまうこともあります。そういった不安定な水場は魚などの天敵が少ない反面、早く上陸しなければ乾燥死してしまう危険もある場所なのです。

トウホクサンショウウオは北関東以北の本州に分布し、やや小形で全長は10〜13cm程度になります。茶色っぽい地味な色をしています。体に白い細かな斑点を持つ霜降模様の美しい個体もいます。4〜5月頃に溪流のよどみや湧水の溜まり、水田の水路など比較的小規模でゆるやかな流れのある水場の石や倒木の裏に、20〜50個程度の卵が入った卵囊を産み付けます。卵囊は細長くコイル状に渦を巻いていて、表面には縦のしわがあるのが特徴です。本種は冷たく安定した水場を好み、「越冬幼生」となって翌年の春まで上陸せずに水中に留まるものも見られます。クロサンショウウオほど共食いは激しくはありませんが、ヒレや指が欠けている個体がよく見られます。